

草の週間に寄せて

岡山県酪農試験場 場長 小 沢 宣 雄

農業を営んでおられる方ならば多かれ少なかれ草の恩恵を蒙らない人はないであろう。家畜の飼料に、厩堆肥の原料に屋根萱に或いはスミ俵に年々歳々草を利用している訳である。また草が降水の流失を防ぎ、土壤に水分を保留して治水の面に役立っている点も見逃せない。

けれども断わりなしに田圃に生えた草はこれを雑草又は害草として邪魔扱いしている。“なぐつても萌え出る世話や春の草”という名句がある如く、実際春先の畑の草取りは大変である。路傍に生えれば雑草として踏みにじられて省りみられない。

こんなに世話のやける草でもひと度これを家畜に与えておの腹を通せば、貴重な乳となり肉となり毛となつて、われわれの生活文化に寄与するところが大きい。また厩肥となつて圃場に還元されれば、稔りの秋を約束してくれる。

これ程人類に貢献している草に対し感謝の念を捧げてくれる人が果して幾人いるであろうか。

わが国の草は数十年、否、数百年來の慣習による火入れによって手入れせられ、自然の天恵としてただ掠奪し続けられてきたのである。

家畜は草の化身である。“草なければ農業なし”と謂われている欧米の農業は、その大半が草地であつて耕地を全く同じ観念で肥培管理されている。それに較べてわが国の草地は灌木、荊棘のじゅうりんにまかされ、野生の草を対象とした最も原始的な生産性の乏しい農業用地とせられている。最近畜産の振興と共に草地の開発が急速に進められつつあるが、この恵まれざる草に対し、われわれは「草の週間」を催し、草に対する認識を更に深め、草を愛し、草地の造成改良並びにその栽培と管理を怠らないよう指導普及することこそ意義あることであると思う。

さて草類の飼料価値について少しく言及してみよう。

普通草類という言葉は、広い意味、狭い意味、いろいろに使われるが、外国でグラスという場合は主としてイネ科の草を指すことが多いようだし、また

草地農業というような場合は青刈飼料作物をも含めた広い意味をもっている。ここでは野草、牧草及び青刈飼料作物を包含した広い意味を草類と表現したい。

草類は家畜のエサとする場合、先ず蛋白質給源として、またビタミン、ミネラル及びカロリー供給源としても貴重な存在であることを再認識してもらいたい。

いつも家畜の飼料として一番問題になる養分は、やはり蛋白質で、この蛋白質給源を如何に安く手に入れるかが、家畜飼養の採算を左右する鍵の一つになっている。つまりわが国では単位当りの価格が蛋白質は澱粉質より高くつく場合が普通である。また農家が自給できる飼料も大部分澱粉質飼料であるので、家畜を飼っている農家は、安くて良質な蛋白補給源の確保に苦心する訳だが、草類はこの条件に最もよく適合した蛋白質給源といえる。即ち草類の蛋白質は極めて複雑であるので、ある特殊な蛋白質だけを与える場合のようにどれかのアミノ酸が特に欠乏するというようなことが比較的少ない。また草類の蛋白質は極めて良質で、このことは蛋白質の生物価の研究者等によって、ますます明らかにされてきている。また草類の蛋白質が割安なことは説明を要しないところである。

次に草類がいろいろのかビタミンを豊富に含むこともよく知られている。特に濃厚飼料にはとかく不足しがちなビタミンA（カロチン等）の給源として極めて価値の高いもので、なんとといっても草類ほど安価にビタミン類を供給する飼料は他に見当たらない。わが国の家畜の飼い方で問題になるのは、冬のビタミンだが、この夏の草類のビタミンをどうやって上手に冬まで保存利用することができるかがそれを解決する鍵となる。

無機質（ミネラル）の問題は、最近盛んに家畜栄養学の上で話題になっており、微量要素についても種々論ぜられているが、実際飼育の面で最も多量に必要で一番問題になるのは、やはりカルシウムと燐、

岡山畜産便り 1961.09

なかでもカルシウムであり、これとからんで灰分の組成がアルカリ性か酸性かというような問題であろうと思われる。最近アルファルファ灰分が消化率に及ぼす影響となどについても米国で研究されているようで、無機物の組成は消化にまで影響する場合がありますようである。全般的にみてわが国の家畜の飼育方では兎角カルシウムが不足し、無機物の組成が酸性に傾き易いことが指摘されているが、草類を豊富に与えればこの問題も大部分解決してしまうといっても過言ではないだろう。草類はその無機質組成が最も家畜に適しており、特に荳科の草類は、カルシウムに富んでいる。兎角酸性に傾き勝なわが国の飼料配布の中に、荳科草類を多く取入れることは、この点からみても大いに意味があると思う。

次にカロリー源としての飼料価値、即ち養分総量（T・D・N）或いは澱粉価の供給源としての草類の価値は、濃厚飼料に較べて高いとは云えない。この点草類のみによる飼養を行なうような場合には注意を要する。つまり草類はたとえ良質なものであっても粗飼料であって、その養分総量含有率は概して濃厚飼料より低く、繊維の含有率が高い。勿論良質の草類は稲藁などに比較して養分総量の含量も多く、粗飼料としては価値が高いのであるが、これを濃厚飼料と同様に使うためには、繊維を減らす操作の必要がある。将来草類だけで家畜を飼うような条件が整ってきた場合には、この養分総量或いは澱粉価が問題になってくると考えられる。

さて家畜には草食獣とそれに属さないものがあるが、草食獣にとって、草類は最もその性質に適合したエサと云えるが、もとより草の種類又は利用時期その他の条件によって家畜の嗜好性が著しく異なるから、これらの家畜の嗜好性をも充分に考慮に入れて草類の活用をはかる必要がある。

県下の8月の牛乳生産 前年の40%増し

農林省岡山統計調査事務所の速報によれば、県下の8月の牛乳生産量は4,557トﾝで、前年8月に比べ1,300トﾝ（40%）の増加となっている。またこれは前月に対して99.3%でほぼ同量で6月に比べると大きく減少している。